

村社柳森神社々記

第一章 緒論

自己を明にせんことを欲せば其父母にしかず。一家の系統を知悉せんことを欲せば祖先に溯究するを要す。吾人群居集團して部落を爲し法治の町村を形作り共存共榮の生活を營むもの之を自治體と爲す。而して其集團たる部落又は町村か何れの時代に於て如何なる動機に依て之を創造せしかを知らんことを欲するは吾人の至情なり。希望なりとす。

神社在り其神靈を奉祀する所感と創始時代を明瞭にし而して後其尊崇すべき靈驗と奉祀すべき原由を闡明し。其真相を自覺諒解し以て彌々敬虔の意を傾け奉祀すべきものなり之を否らすして崇始の因由も不明神靈の何たるをも極めずして漫然として信するもの之を迷信と言ひ盲信と稱し誤信とも言ふのである。今や帝國の大勢を察するに。時代思潮は頗ふる混亂し。新舊思想は交錯を極め民衆は其歸響する所を迷ひ。危険思想は醸生し機勢漸く急激の時に當り。國民精神の基準を知り國民道徳の振興を圖り人心の浮動を靜め疑惑を一掃し。辛竦不正の邪惡と煽動を排除し。國體に副ふ健全なる思想を好愛せんことを欲せば。神其靈に信仰し尊崇し以て所信を鞏固ならしむるにありと信するものなり。故に柳森神社の創始と神靈の何物たるかを多衆が知悉するは最も必要の事と思考し。神社の真相を明確に諒解を與へんとす。